

「自動詞」・「他動詞」の教材作成についての一考察

横田隆志*

A study of the teaching materials when introducing "Intransitive Verbs"
and "Transitive Verbs"

Takashi Yokota*

Received November 30, 2011

Abstract

The purpose of this study is to consider the effective methods of introducing "Intransitive verbs" and "Transitive verbs" using movies.

The use of intransitive and transitive verbs in the Japanese language is one of the difficult grammatical rules for Japanese learners, and it is considered to be one of the items which is easily confused. This is because that some languages make no distinction between the intransitive and transitive verbs, like the Japanese language do. So it is difficult to understand the concept itself of the intransitive verb and transitive verb. In addition, the concept of intransitive and transitive verbs is explained using English grammar in various textbooks. But this does not agree properly. Furthermore, the differences in form and meaning of intransitive and transitive verbs are insisted, and the use of the particle is mainly introduced in the beginner's class. So the difference in concept of intransitive and transitive verbs is hardly explained. Also, the use of intransitive and transitive verbs is shown whether an intention-like act is included, or an intention-like act is not included.

However, the usage of intransitive or transitive verbs depends on whether you place a viewpoint in a thing, the matter or person. It is very important to learn the concept of the difference between the intransitive and transitive verb at the early stage, but there seems to be very few appropriate teaching materials because it is difficult to include it in the teaching materials.

Therefore, the problems of how to effectively introduce the concept of intransitive and transitive verbs were considered, and finally, this study proposed the possibility of using teaching materials which can express the concept of intransitive and transitive verbs using pictures as shown from the Japanese language speaker's viewpoint.

* 国際交流センター

International Exchange Center

キーワード

日本語の視点・映像教材・自動詞・他動詞・教授法

1 はじめに

日本語の自動詞・他動詞は日本語学習者には難しく、混乱しやすい項目の一つであるとされている。なぜなら言語によっては日本語のように自動詞・他動詞の対立をあまり意識しないものもあり、自動詞・他動詞の概念そのものを理解するのが難しいからである。また、英語の自動詞・他動詞の概念を日本語に当てはめている場合があるが、それもきちんと一致するわけではない。更に、初級では自動詞と他動詞の作り方や意味の違い、助詞の使用を中心に導入することが多く、日本語の自動詞・他動詞の概念的な導入がされていないのが事実である。また、意志的な行為が含まれているか意志的な行為が含まれていないのかのみで自動詞・他動詞の使用を導入することが多い。

しかし、自動詞文と他動詞文では、行為者に視点を置くか、物や事柄に視点を置くかで使用が変わってくる場合が多い。このような自動詞・他動詞の概念を初級で学ぶことは非常に重要なことであるが、それを教材にすることは難しいため適切な教材が少ないように思われる。

そこで、本研究では自動詞・他動詞の導入方法の問題点を挙げ、自動詞・他動詞の概念を「日本語の視点」から映像で表現できるような教材の可能性を考察する。

2 「自動詞」「他動詞」の使い分け

2-1 「自動詞」「他動詞」の形

日本語学習者が自動詞・他動詞^{註1}の区別をする難しさの原因としては大きく3つに分けられる。1つは形が非常に似ていること。2つ目は学習者の母語に自動詞、他動詞の区別がない言語もあり、自動詞・他動詞の概念的な理解が難しいこと。そして、どのような時に自動詞を使い、どのような時に他動詞を使用するのが明確ではないことである。

まず、形について自動詞・他動詞はペアで存在することが多い。そこで、自他の対応がある動詞を挙げてみる。

- (1) 開(あ)くー開(あ)け る、閉まるー閉める、消えるー消す、つくーつける、始まるー始める、終わるー終える、割れるー割る、なおるーなおす、上がるー上げる

このようにペアで存在する自動詞・他動詞は形、音が非常によく似ており、自動詞から他動詞を作るルール、また、他動詞から自動詞を作るルール^{註2}も多岐にわたっているために初級の授業でそのルールを教えることは非常に難しい。また、(2)のように一つの動詞で自動詞、他動詞を兼ねるものや(3)のように自動詞のみしか存在しないものや他動詞のみしか存在しないものもある。

- (2) 仕事が終わる。(他動詞)

仕事を終わる。(自動詞)

ドアを開(ひら)く。(他動詞)

ドアが開(ひら)く。(自動詞)

- (3) 自動詞のみ—いる、ある
他動詞のみ—書く、作る

そのために日本語学習者が自動詞として使用したつもりが、他動詞だったり、他動詞として使ったつもりが自動詞だったりする場合がある。また、形が完全に作れないというようなことも起こり得る。

自他の対応がある場合は(4)のようにどちらも使うことができるものもあり、違った表現をすることができる。

- (4) ドアが開いた。
私がドアを開けた。

このように一般的には「(動作主)が(対象)を」の形になるものを他動詞とし、それ以外を自動詞とすることが多い。庵(2001)では次のようにまとめている。

- a. 自動詞：〈ガ(動作主)、ヲ(対象)〉という枠組みを含まない動詞
b. 他動詞：〈ガ(動作主)、ヲ(対象)〉という枠組みを含む動詞

このように文字通り他に動作の影響が及ぶものを他動詞とし、他と関わりがなく、目的語は伴わないものを自動詞としている。

また、自動詞を使う場合、他動詞を使う場合の意味については、庵(2001)は、自動詞は事態が非意志的(≠自発的)に起こることを表し、主体は通常「もの」であるのに対して、他動詞は動作主が意志的に事態を引き起こすことを表し、主体は通常「有情物(人間および動物)」であると述べている。つまり、自動詞を使用すると、自然の影響などで出来事が起こり、そこに人間や動物の意志や意図は含まれていないものとなる。一方、他動詞を使う場合は人間や動物の意志的にある出来事を引き起こした出来事だと考えられる。しかし、同じ出来事でも動作を受ける対象であるドアに注目すると「ドアが開きました」になり、動作に注目すると「田中さんがドアを開けました」となる。このように話し手が動作主に焦点を当てているか、動作を受ける側に焦点を当てているかによって自動詞と他動詞が使い分けられている(市川2005)。このように日本語では物事の捉え方や表現が二つあり、使い分けする必要がある。しかしこのような使い分けは学習者の母語によっては意識しないものや使い分けそのものが必要ない言語もあるために、自動詞・他動詞の使い分けは日本語学習にとって難しいとされているのである。

2-2 「自動詞」「他動詞」の使い分け

それでは日本語話者はどのように自動詞・他動詞の使い分けを行っているのだろうか。市川（2005）は以下の表のようにまとめている。

表 1

	他動詞	自動詞
①	話し手が動作主に注目している	話し手が動作を受ける対象に注目している
②	「どうするか」という他への働きかけを表す	「どうなるか」という結果を表す
③	意志的な行為ととらえる	人間などの意志（意図）は含まれていない
④	行為に注目する	行為の結果や変化に注目する
⑤	「だれがしたか」が重要である	「だれがしたか」を言う必要がない
⑥	「積極的にした」という感じがある	「積極的にした」という感じがない

ここでは6つの特徴に分けられているが、大きく3つに分けることが可能である。1つは、話し手が動作主に焦点を当てているか、動作を受ける対象に焦点を当てているかによって使い分けられる(①)。もう1つは、働きかけの主体を具体的に提示し、意志的動作であることを示すのか、変化主体を提示し、自然な変化であることを示すのかによって使い方が決められている(③、⑤)。また、動作の過程を重視しているか、結果に重点を置いているかによって使い分ける(②、④)。例えば、働きかけの主体を具体的に表し、意志的動作に注目すると(5)のような文になり、人間の意志が含まれていない場合には(6)のような文になる。

- (5) 田中さんがたまごを割りました。
 (6) たまごが割れました。(テーブルから落ちて)

また、「ドア」に焦点を当てている場合、ドアが開いたという結果に注目している場合には(7)のような文が作られる。また、「誰」が開けたかということに焦点を当てると(8)のような文になる。

- (7) ドアが開いた。
 (8) 田中さんがドアを開けた。

更に、表1のような使い分け以外にもいわゆる「日本語らしい」文として(9)、(10)、(11)のような表現がある。

- (9) 3月で会社を辞めることになりました。
 (10) ドアが閉まります。
 (11) 借りていたストーブが壊れてしまいました。

(12) 借りたりしていたストーブを壊してしまいました。

これは日本語では動作主が存在を隠すことが丁寧な表現として好まれる傾向にあるからである(庵2001)。そのため(9)のように会社を辞めることを決定したのは自分であるが、あたかも他人が会社を辞めることを決定したような言い方の「辞めることにしました」が実際の場面では多く使われるのであろう。また、(10)のように駅で聞くアナウンスでは「ドアを閉めます」が多く使われている。これも動作主の存在を消し、丁寧さも表現しているためである。更に(11)のように自動詞を使うと自然に壊れたというような印象があり、(12)のように他動詞を使用すると自分も責任を感じているということも表現できるので、一般的には(12)のように他動詞を使うことが多い。このような使い方は基本的には表1にあるような自動詞・他動詞の性質や特徴であり、実際の場面では状況に応じた好まれる表現が使われている^{注3}。

2-3 「自動詞」「他動詞」の使い分けの誤用

以上のように形と意味で自動詞・他動詞の使い分けが求められるために日本語学習者にとって的確に選択をして使用することが非常に難しい。そのため自動詞・他動詞を選択し、使用する際に日本語教育の現場では数多くの誤用が見られる。その誤用にはどのような特徴があるのだろうか。ここでは、日本語学習が起す誤用について分析してみる。

(13) 11月にコースが始めました(始まりました)。

(14) 電車のドアがまだ閉めない(閉まらない)うちに、

(市川 1997)

(13)(14)は自動詞にするべきものを他動詞にしてしまった誤用例であり、単なる動詞レベルでの混同である。なぜなら、これは各動詞がとっている格助詞が「が」格で主語を立てているが、使っている動詞が他動詞になっているからである。市川(1997)はこのようなものは初級の日本語学習者だけではなく、日本語のレベルがあがっても見られると述べているように、自動詞・他動詞の形や音の類似性による混同による誤用であると考えられる。

(15) 大学でもらった成績によって、いい仕事を見つける(が見つかる)かどうか

(16)・・・という音で私の目が覚めた(私は目を覚ました)。

(市川 1997)

(17) (なかなか開かないビンのふたを開けて) 開けた(開いた)！

(15)は構造的に自他の動詞の混同をしていると考えられる。なぜなら、「を」格をとっていて、きちんと他動詞を使用しているために、文法では問題なく、他動詞文を使用すると不適切になるからである。(16)は特に人的な力が加わった場合でなくても自然におこる現象に他動詞を使用するという日本語の特徴が原因である。これは物事や事態を起こした人に焦点をあてている場合に使われるか

らである。つまり、焦点をどこに当てているかを考えて動詞の選択をしなくてはならないのである。また、これと反対に（17）のような場合は自動詞を使う。これは動作主に視点が置かれているわけではなく、ピンのふたに焦点が当てられていて、開けようとした結果、ふたが開いたので自動詞を使う。

また、（18）のように自動詞を使った方が自然になる場合、他動詞を使った方が自然になる場合といった日本語らしさの問題も見られる。

（18） 今度、結婚することにしました（なりました）。

以上のことから、日本語学習者が起こす誤用に関しては①動詞の混同、②自動詞、他動詞の選択によるもの、③誤用ではないが選択したものが不自然に聞こえる場合の3つの種類があることが分かる。

3 導入方法の問題点

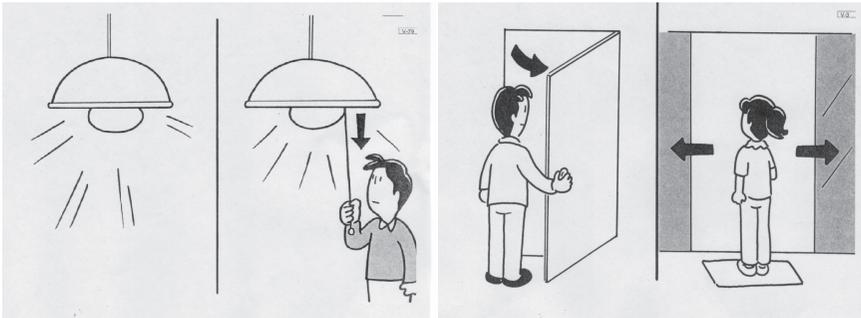
3-1 「自動詞」「他動詞」の概念の教授

自動詞・他動詞の導入では、音や表記が非常に似ているために語彙を中心に導入を行う場合が多いのが事実である。また、「が」格をとるか、「を」格をとるかといった文法事項の習得のために多くの時間をかけてしまう。しかし、2で考察したように自動詞、他動詞の使い分けは複雑であり、その概念を理解するには時間がかかると思われる。そのため基本的な自動詞・他動詞の使い分けには十分な時間をかけて導入することが少ない。このような導入での学習は形式重視で実際のコミュニケーションの場では役に立たないであろう。コミュニケーションをするうえで効果的な自動詞・他動詞の導入にはやはり、自動詞・他動詞の概念的な理解が必要であり、それを初級の段階から理解させることが重要である。

3-2 意志的行為に重点を置いた教育

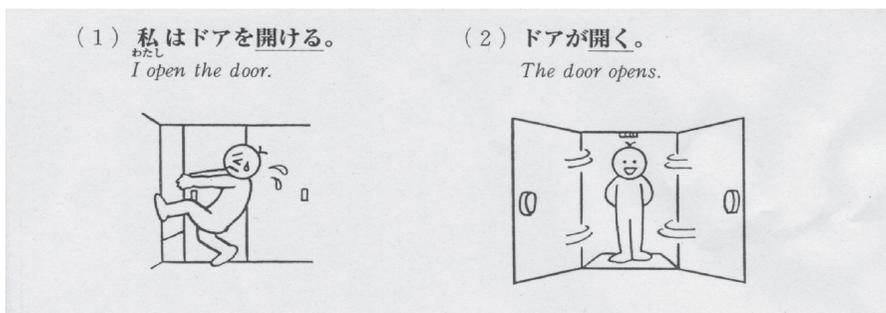
2-2で述べたように自動詞・他動詞の選択は3つの視点から使い分けられていることが分かる。①話し手が動作主に焦点を当てているか、動作を受ける対象に焦点を当てているかによって使い分けられる。②働きかけの主体を具体的に提示し、意志的動作であることを示すのか、変化主体を提示し、自然な変化であることを示すのかによって使い方が決められている。③動作の過程か結果に重点を置いているかによって使い分ける。しかしながら、多くの初級教材では②の「働きかけの主体を具体的に提示し、意志的動作であることを示すのか、変化主体を提示し、自然な変化であることを示すのかによって使い方が決められている」ということだけを重視し、それだけが自動詞・他動詞の使い分けの基準になると理解されがちである。そのため、学習者は自動詞は自然に何か起きたときに使用し、他動詞は意志的に何かを行ったときに使用すると認識してしまい、なかなか開かないピンの蓋を開けた時などに「開けた」と言うような誤用が生まれる原因となっている。

図 1



『日本語の教え方スーパーキット』

図 2



『Situational Functional Japanese』

日本語学習者の母語で自動詞・他動詞の区別がない場合は、自動詞・他動詞の導入では概念を学習者に分らせることが必要であるために、絵カードや実際に教師が行うことによって自動詞・他動詞の使い分けを導入していることが多いのではないだろうか。しかしながら、図1、2の絵カードを見る限り、意志的か意志的でないかということだけで自動詞・他動詞の使い分けを誤って理解してしまう可能性がある。自動詞・他動詞の使い分けには①の「話し手が動作主に焦点を当てているか、動作を受ける対象に焦点を当てているかによって使い分けられる」ことや③の「動作の過程か結果に重点を置いているかによって使い分けられる」ことも同じように絵カードで導入する必要がある。

3-3 自動詞（現象を表す）の導入の難しさ

自動詞・他動詞の導入の際には教師があることを実際に行い、導入する場合が多い。しかし、現象を表す自動詞の導入は難しく、実際導入でも「火が消えました」などしか使えなく（図3）、理解できるようにするためには例が少なすぎると思われる。

図 3

[1] [自動詞]・[他動詞]の導入

自動詞・他動詞がペアになっているものの絵カードやフラッシュカード、そしてマッチと灰皿を用意する。

- T : <マッチを手にとり>マッチです。 <と言って火をつける>マッチを消します。 <と言って、マッチを吹き消す>マッチを消しました。先生は…
…<と言って、学習者を促す>
- L : 先生はマッチを消しました。
- T : <次にマッチをつけて、灰皿に置き、燃えつきるのを見守り、火が消えたら>先生はマッチを消しましたか。
- L : いいえ。
- T : <学習者が首を振るのを見て>消しませんでしたね。消・え・ました。マッチが消えました。
- L : <リピート>マッチが消えました。 

『日本語の教え方 ABC』

守屋 (1999) も述べているように教師が電気をつけて、「つけました」を導入するのは問題がないが、「電気がつきます」と言って教師が電気をつけるのは反対に学習者が混乱する原因になっているのではないだろうか。図 4 のような意志が感じられない自然に起る現象を表す自動詞が偶然授業中に起こることは考えられないし、教師が実際の行動で起こすことも難しい。また、電気だけに焦点を当てさせれば、「電気がつきました」という表現は問題ない。しかし、導入の際に教室にいる学習者が同じような視点で電気だけに焦点を当てているかどうかを確認することは教師にとって困難なことである。

図 4



『みんなの日本語 II』

4 日本語の視点と映像による教材

4-1 映像による教材

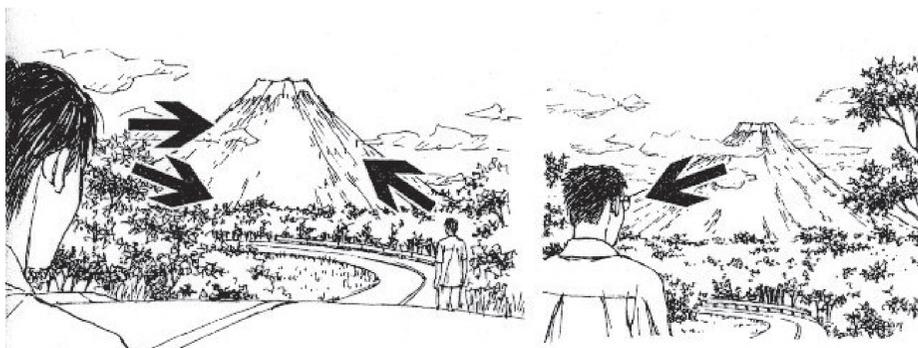
このような問題を解決するために映像教材での導入が効果的ではないかと考える。映像ならば、同じ出

来事でもズーム^{注4}を使い、何に焦点を当てているかが明確に分かる。例えば、ドアを誰かが開けた映像をドアにズームして自動詞の導入をし、また同じ映像でドアを開けた人物が現れるところで他動詞の導入をする。また、現象を表す自動詞の導入も映像にあるために教師が教室で何かを行い、それによって導入する必要がなくなるし、誤解を生むことも少なくなるだろう。更に紙での教材では表現できなかった連続性と空間を映像では表現できるために自動詞・他動詞の使い分けを①話し手が動作主に焦点を当てているか、動作を受ける対象に焦点を当てているか、②働きかけの主体を具体的に提示し、意志的動作であることを示すのか、変化主体を提示し、自然な変化であることを示すのか、③動作の過程か結果に重点を置いているか、によって使い分けるという自動詞・他動詞の概念をきちんと伝えることが容易である。

4-2 日本語の視点からの映像

横田 (2007) は「日本語の視点」を「一人称を言語化する必要がなく、常に一人称の内の視点から言語化されているもの」とすると「虫の視点」^{注5}からの教材が「日本語の視点」を習得しながら文法項目も習得するのに適しているだろうと述べている (図5)。このような「日本語の視点」から教材を作成することによって日本語らしさも習得できるであろう。また、視点が状況そのものにある「虫の視点」からの教材では、教科書のように2次元の世界では空間を現すのは難しいため、映像での教材のほうが「日本語の視点」を習得するには有効的であると考えられる。この映像は「あたかも」学習者が体験をしているかのような視点であるために事態をどのように把握しているのが明瞭であり、教室で見ている全員が同じ視点で学習できるために教師が電気だけに注目させて、「電気が消えました」というような乱暴な導入ではなく、焦点の当て方も具体的に理解できるという利点もある。

図5



「神の視点」

「虫の視点」

金谷 (2004)

4-3 教材の可能性

以上のことから映像による自動詞・他動詞の教材を作成した。以下の教材は実際には動画であるが、ここでは動画を使用することができないので、静止画を使用する。

図 6



図6では同じような映像を使用してもズームによって、ろうそくに焦点を当てると「ろうそくに火がつきました」という文が作れ、ズームを使用せずに、火をつける人物に焦点を当てると「崔さんが火をつけました」という文になることが理解しやすい。また図7のようにふたに注目をさせることによって「ふたが開きました」という文が作れることを映像で表すことができる。

図 7



図 8



図8では突然電気が消え、そして、つく。これによって現象を表す自動詞を教師が何かをすることなく、導入することが可能である。

このような映像での教材ではどのような視点の際に自動詞・他動詞を選択するのが明確であり、自動詞・他動詞の概念や使い分けを学習者に分かりやすく伝えることができるであろう。

5 まとめ

本研究では、映像を使用した自動詞・他動詞の導入方法について考察した。既存の教材や教え方では自動詞・他動詞の概念を理解させるのは難しく、導入方法の不適切さからの誤用も多く見られることが明らかになった。そして、その問題を解決するために、「日本語の視点からの映像教材」を使用した自動詞・他動詞の導入についての可能性を探ることができた。このような映像による教材は、学習者が自動詞・他動詞の概念を理解しやすく、使い分けをする際に役に立つと思われる。

しかし、今回の研究では映像における自動詞・他動詞の導入が本当に効果的なのかという調査・研究はできなかった。今後はこの映像教材を実際の教室で使用し、データを取る必要がある。そして、そのデータから見える問題点を改善する必要がある。

注

1 自動詞・他動詞の区別の方法には様々なものがあり、日本語の場合は両者を区別しないという立場もある。ここでは一般的に使われている「を」格の目的語をとらず、直接受身にならないものを自動詞、「を」格の目的語をとり、直接受身になるものを他動詞とする。

2 松岡（2000）ではルールを示している。以下は市川（2005）がまとめたものである。

- ① 自動詞には-aruで終わるものが多い。
- ② -aruで終わる自動詞を-eruに変えると他動詞になるものが多い。
- ③ -reruで終わるものは自動詞が多い。
- ④ -suで終わるものはほぼすべて他動詞である。

しかし、日本語教育で取り上げるには非常にレベルが高く、「多い」というだけできちんとしたルールとして教えるのは難しい。

3 池上（1981）では自動詞の典型が「なる」で、他動詞の典型が「する」で、日本では文化的に「なる」を好むと述べている。

4 カメラやビデオなどの光学機器で焦点が合っている状態で連続的に倍率を可変させる構造や機能のこと。

5 金谷（2004）は日本語の視点は虫が地上を進むように、時間とともに移動する視点であると述べている。また、森田（1998）は日本語は「蛇の視点」として地面を這って進む爬虫類、蛇のように前へ進みながら進行方向を適宜変えて行くことの許される恣意性の高い言語と述べている。

参考文献

- 庵功雄（2001）『新しい日本語学入門』スリーエーネットワーク
池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学』大修館書店
池上嘉彦・守屋三千代編著（2009）『自然な日本語を教えるために』ひつじ書房
市川保子（1997）『日本語誤用例文小事典』凡人社
市川保子（2005）『初級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク
宇津木愛子（2005）『日本語の中の「私』』創元社

- 川口義一 (2005) 「文法はいかにして会話に近づくか」『フランス日本語教育』第2号
- 金谷武洋 (2004) 『英語にも主語はなかった』講談社選書メチエ
- 久野暲 (1978) 「談話の文法」大修館書店
- 白川博之監修 (2001) 『中上級を教える人の日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 新屋映子・姫野伴子・守屋三千代 (1999) 『日本語教科書の落とし穴』アルク
- 須賀一好・早津恵美子 (1995) 『動詞の自他』ひつじ書房
- 寺田和子・三上京子・山形美保子・和栗雅子 (1998) 『日本語の教え方ABC』アルク
- 野田尚史 (2004) 「見えない主語を捉える」『言語』V o 1 3 3. N o 2、大修館書店
- 野田尚志編 (2005) 『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版
- 松岡弘監修 (2000) 『初級を教える人の日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 森田良行 (1995) 『日本語の視点』創拓社
- 森田良行 (1998) 『日本人の発想、日本語の表現』
- 森田良行 (2002) 『日本語文法の発想』ひつじ書房
- 森山新 (2007) 「視点についての認知言語学的考察」『認知言語学的視点を生かした日本語教授法・教材開発研究2年次報告書』
- 横田隆志 (2008) 「日本語初級教材のイラストに見られる『視点』の分析」北陸大学紀要第32号

参考教材

- スリーエーネットワーク (1998) 『みんなの日本語初級Ⅱ本冊』スリーエーネットワーク
- 筑波ランゲージグループ (1991) 『Situational Functional Japanese Volume two: Notes』(初版) 凡人社
- 水谷信子監修 (1999) 『日本語の教え方スーパーキット』アルク